

ミシェル・ジャンヌレ教授特別講演  
「17世紀におけるエロティスム」

2001年9月、京都大学文学研究科は、日本学術振興会の招聘事業にもとづき、スイスのジュネーヴ大学教授ミシェル・ジャンヌレ氏を一ヶ月の予定で迎え、2度の連続講演をはじめ、研究者との会合など学術交流をおこなった。以下に収録するのはこのときの講演原稿である。

ジャンヌレ氏は1940年生まれ、ヌーシャテル大学およびケンブリッジ大学で勉学された後、ジュネーヴ大学で教鞭を執られ、とりわけ16・17世紀フランス文学について研究を続けてこられた。マルセル・レーモン、ジョージ・スタイナー、ジャン・スタロバンスキーといった輝かしいジュネーヴ学派の批評の遺産を継承した同氏の独特の研究スタイルは、パリを中心とするフランス文学研究のややもすると中央集権的な視座から解放された、自由な切り口にその魅力を負っていると言えよう。

主要な著書として、次のものがある。

- Poésie et tradition biblique au XVI<sup>e</sup> siècle. Recherches stylistiques sur les paraphrases des psaumes de Marot à Malherbe.* Paris, Corti, 1969.
- La lettre perdue. Ecriture et folie dans l'œuvre de Nerval.* Paris, Flammarion, 1978.
- Des mets des mots. Banquets et propos de table à la Renaissance.* Paris, Corti, 1987.
- Le défi des signes. Rabelais et la crise de l'interprétation à la Renaissance.* Orléans, Paradigme, 1994.
- Perpetuum mobile. Métamorphoses des corps et des œuvres, de Vinci à Montaigne,* Paris, Macula, 1997.

(吉田 城)